中学生のコミュニティ感覚とメンタルヘルスの関連

D09-4002　木村妙
指導教員　朝倉隆司

キーワード：中学生、コミュニティ感覚、メンタルヘルス

１、はじめに

地域社会や家庭環境の大きな変化は、家庭および子どもと地域とのつながりの低下をもたらした。一方、現代の子どもの問題は多様化しており、とりわけ学校における問題では、メンタルヘルスと深く関連していると考えられる問題が非常に多い。本来であれば、子どもの問題は、家庭や地域の大人たちが子どもの異変に気付いたり、子どもが大人に助けを求めることのできる状況があるはずである。地域のつながりは子どもたちの抱える問題を発見し、解決する手段の１つなのではないだろうか。先行研究によると、コミュニティ感覚をもつことが、精神面や心理面への影響を及ぼすことが明らかとなっている。そこで、中学生の地域に対する密着度や愛着が彼らのメンタルヘルスとどのような関連にあるのかを明らかにしたいと考えた。よって本研究の目的は、中学生を対象に「個人を超えた情緒的なつながりが、コミュニティの集団生活を形作っているという信念」である、“コミュニティ感覚”と、メンタルヘルスの関連を、ソーシャルサポートや孤独感、対人関係能力、学校生活満足度などの変数との関係を含めて検討することである。

２、方法

中学生のコミュニティ感覚、対人関係能力、学校生活満足度、ソーシャルサポートや孤独感、メンタルヘルスについて調査票を作成し、アンケート調査を行った。調査の対象は、東京都の市内にある公立中学校１年生、２年生、３年生の計 211 名で、自記式質問紙調査を実施した。回収数は 211 名で、男子 112 名（53.1%）、女子 99 名（46.9%）であった。回収率は 100%で有効回答率は 98.1%であった。調査期間は、2012 年 12 月 4 日から 12 月 7 日である。使用する尺度の妥当性・信頼性を調べるために、コミュニティ感覚尺度、対人関係能力尺度、学校生活満足度尺度、メンタルヘルス尺度、身体症状尺度の因子分析および信頼性分析を行った。アンケートは分析統計ソフト「PASW Statistics 18 + AMOS」および「IBM SPSS Statistics19」を用い、相関分析、重回帰分析およびパス解析を行った。

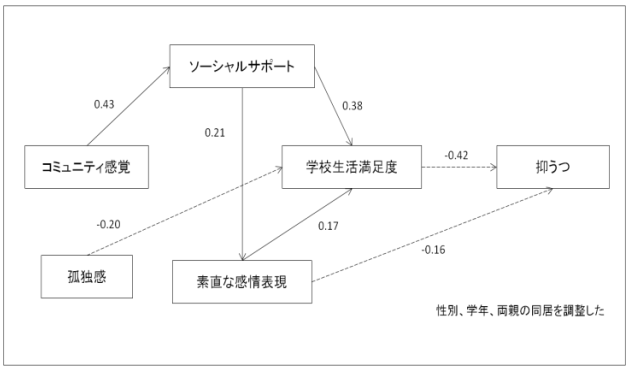
３、結果と考察

１）中学生のコミュニティ感覚について

中学生コミュニティ感覚の平均値は 3.75、標準偏差は 1.47 であった。基本属性によるコミュニティ感覚得点の平均値の差を見るために、ｔ検定、一元配置分散分析を行った結果、性別、学年、両親の同居の有無、習い事および部活動への所属の有無におけるいずれにおいても、有意な差はみられなかった。

２）コミュニティ感覚とメンタルヘルスの関連

重回帰分析の結果からパスモデルを作成し、AMOS を用いて検定した。(図 1) 図 1 から、コミュニティ感覚は①ソーシャルサポート、学校生活満足度を介して、抑うつを低下させる、②ソーシャルサポート、素直な感情表現を介して、抑うつを低下させる、③ソーシャルサポート、素直な感情表現、学校生活満足度を介して、抑うつを低下させる、３つの過程があることがわかった。どの過程においても、コミュニティ感覚の高さが、ソーシャルサポート、学校生活満足度、素直な感情表現を介し、結果として抑うつを低下させることにつながることがわかった。つまり、中学生にとって良好なメンタルヘルスを保つために、コミュニティ感覚を高めることが必要であるといえる。



（図 1）

４、結論

本研究の結果、中学生において、コミュニティ感覚がメンタルヘルスに与える影響には３つの過程があることが明らかとなった。コミュニティ感覚は、ソーシャルサポート、学校生活満足度、素直な感情表現を介して抑うつを低下させることから、メンタルヘルスと関連があるといえる。つまり、中学生にとって地域とのつながりを強め、コミュニティ感覚を育てることが重要である。